

第6章 久賀島の文化的景観としての価値

第1節 ツバキ林の分布と管理

(1) ヤブツバキの潜在植生

久賀島の山林の植生は、かつて田畑の開墾や薪の伐採が進んだ影響で、二次林であるシイ・カシ萌芽林が主体であり、一部スギ・ヒノキの植林が見られる。植生図を見る限りヤブツバキの密度は小さく、わずかに亀河原や長浜の沿岸部に見られる程度である。

一方、平成21年に五島市農林課が実施したコドラード調査は、1平方kmあたり10箇所の10m×10mの方形観測地点を10箇所設け、島内のヤブツバキをカウントしたところ、推計で



折紙展望台付近のヤブツバキ
雑木を払ったところ、かなりの密度で自生していた。

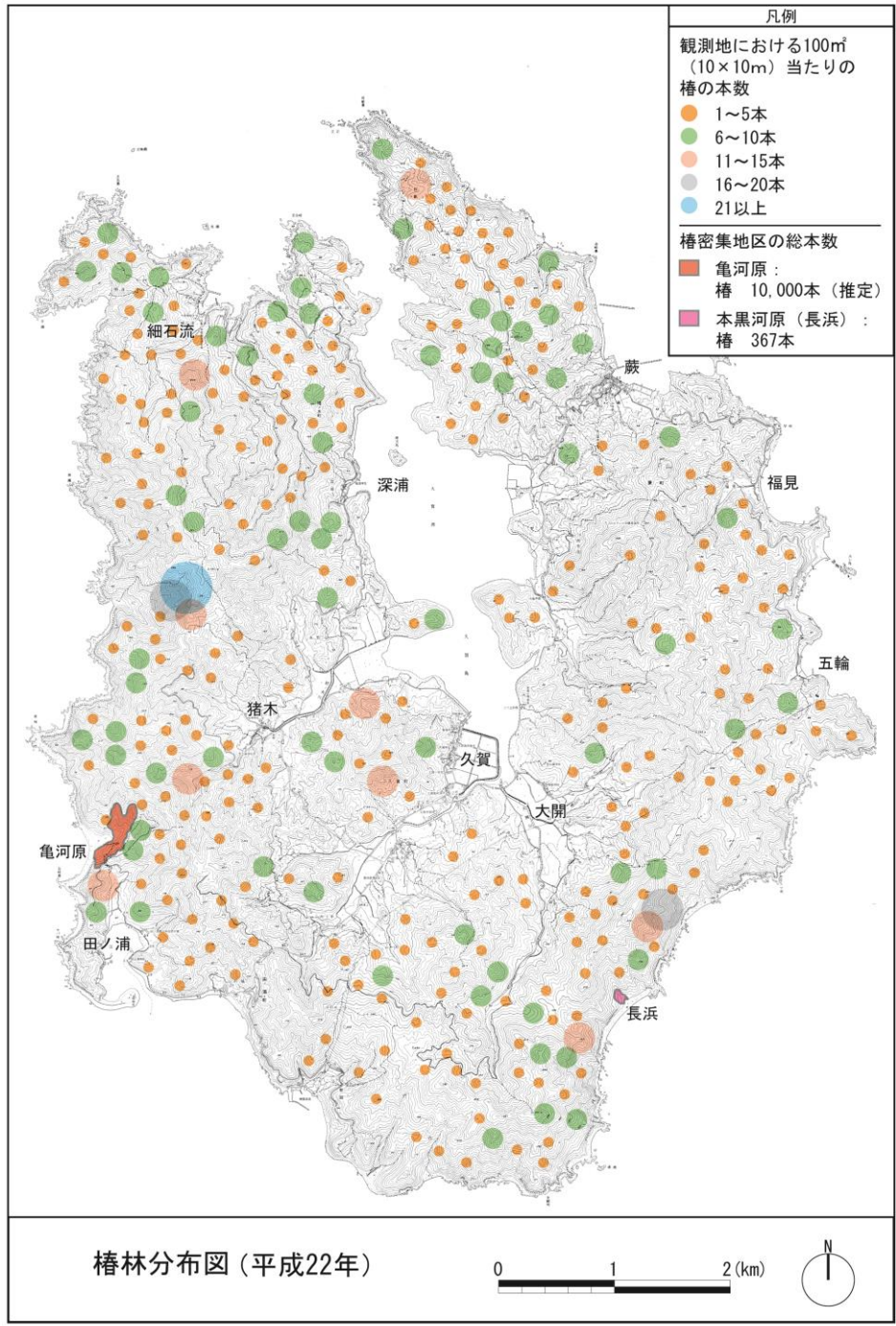
811,580本のヤブツバキが自生していることが分かった。自生密度では、五島列島の他の島と比べて最も高い。ツバキ林が次々と放棄された昭和40年代以降、シイ・カシ萌芽林と化す中でこれらの高木に覆われてしまったが、現在でも中低木としてかなりの密度で自生していたのである。また、折紙展望台を設置する際に雑木を払ったところ、かなりの密度でヤブツバキが自生していたことは、聞き取り調査でも明らかになっている。

このように、久賀島の山林には潜在的に非常に多くのヤブツバキが自生しており、五島列島の他の島嶼と比較しても特異な植生であることがうかがえる。

(2) ツバキ林の管理とその特徴

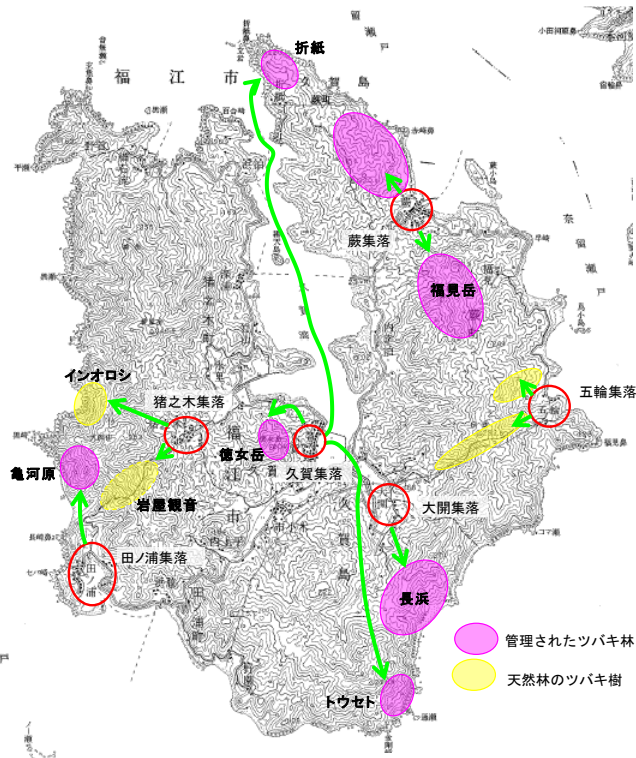
久賀島におけるツバキ林は、昭和40年頃まではいずれも集落の郷有林であり、蕨集落の事例のように、ツバキ樹の伐採だけでなく薪そのものの採取も厳しく規制された、ツバキ実採取専用の林であったと推測される。

ツバキ林では、9月～10月のツバキ実採取に先立って、ほとんどの集落で下草刈り（シタザラエ）を共同作業で行っていた。これは、林床内の下草をすべて刈り取るというよりも、ツバキ実採取に際して、ツバキ林への進入経路を確保するための小規模な草刈りであった。また、ツバキ実採取後に再度下草刈りを行う集落は蕨集落のみであり、他の集落ではツバキ実採取時に地面が踏み固められて下草が生えなかったため、下草刈りは行わなかったという。さらに、猪之木集落のインオロシや岩屋観音のように、郷有のツバキ林として認識されながら、下草刈りやツバキ実採取日の決定といった共同作業や決まり事が一切なかった集落も存在し、久賀島におけるツバキ林管理を目的とした意図的な活動は、意外にも低調であった印象を受ける。



※平成 21 年度に五島市農林課が実施したツバキ分布調査成果を修正・加筆。

ここで注目したいのが、ツバキ林の分布状況である。いずれの集落も、集落近辺のツバキ林以外に、外海に面した谷沿いにツバキ林を有している。久賀島は分水嶺が外海寄りに偏っており、久賀湾に面した集落からは遠距離であるうえ、ほとんどの場合分水嶺を越えて徒歩でツバキ林までアクセスしなければならないが、非常に苦労したとの話も聞く。それにもかかわらず、外海に面した谷間のツバキ林を頻りに利用したのは、この場所のツバキでなければならない理由があったからである。

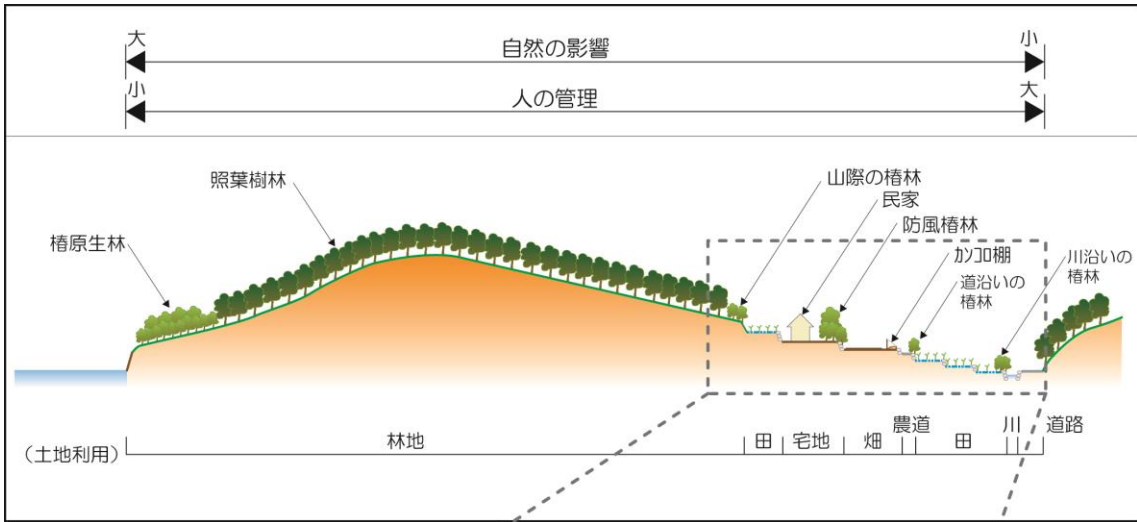


久賀島におけるツバキ実採取地

猪之木集落での聞き取り成果によれば、外海に面した郷有のツバキ林は、一様に樹高が低かったという。五島列島は、冬場の北西の季節風が強く、秋には前線の影響で北東や南よりの風が強く吹く地域であり、久賀島も例に漏れない。外海に面したツバキ林は、潮風に当たることで樹高が抑制され、他の樹木の繁茂も限定されていた。久賀島でのツバキ実採取は、木に登って採取する点が特徴の一つであるが、樹高が高いと作業がしにくく落下する危険も伴うのに対し、樹高が低いツバキ樹はツバキ実採取に非常に有利である。また、季節風の影響で他の樹木の繁茂が抑制されているため、年に一度集団でツバキ林に入って地面を踏みつける程度で、下草を押さえてツバキ林を維持することができた（註2）。

つまり、久賀島では、ツバキ林を集団で意図的に管理して維持していたのではなく、むしろ、島内に豊富に自生するツバキの中から、最小限の手間で維持管理が可能で、ツバキ実採取に有利なツバキ樹が多い場所を、選択的にツバキ実採取地として利用していたことになる。また、集団でツバキ林に入って反復的にツバキ実採取をおこなう行為そのものが、結果としてツバキ林を維持することにつながっていた。ツバキ林の形成と維持管理は、久賀島の地形と気象条件に基づく独特の植生を巧みに利用することによって成り立っていたのである。外海に面した亀河原ツバキ林や長浜ツバキ林は、現在もツバキ林の面影を残しており、島民の知恵の一端を知ることができる。

次に示す図は、久賀島におけるツバキ利用に関する景観構造イメージ図である。



久賀島景観構造イメージ

第2節 ツバキ油生産とその特色

(1) ツバキ実採取とツバキ油生産

①クチアケ・バラシ

久賀島における郷有林でのツバキ実採取は、採取日を決めて共同で採取し（クチアケ）、その後は集落の構成員が自由に採取して良い（バラシ）という暗黙のルールが存在した。このようなルールづくりは、資源管理を目的として、漁業や沿岸での採集活動（海草や貝類の採取）で行われることは多いが、陸上の植物を対象とした事例は極めて珍しい。明治時代以降、ツバキ実採取が盛んであった五島列島全域を見渡しても、久賀島だけで確認することができる。

②ツバキ実採取

ツバキ実採取は木に登って行っていたが、これは地面に落ちたツバキ実は虫に喰われて搾油に適さないためであるという。木に登っての作業は常に落下の危険が伴う。そのため、「ドンザ」と呼ばれるツバキ実採取専用の作業着を着用した。採集袋の役割を果たすこの作業着を着用することで、木の上で両手を使って安全に作業ができただけでなく、一度の木登りで大量のツバキ実を効率的に採取することができた。採取したツバキ実は、共同作業に参加した構成員で均等に分配する場合（大開・久賀集落）もあれば、採取した量がそのまま個人収入になる場合もある（蕨集落）。いずれにしても、このような共同作業や再分配を通して、集落の構成員としての紐帯を強めていたことは、各集落に残る神社や祠にまつわる信仰行事の豊富さにも垣間見ることができる。

以上のようなツバキ林を中心としたツバキ実採取以外に、個人が所有する山林や共有地などでも随時ツバキ実を採取していた。つまり、ツバキ林での共同採取と、個人所有地での個人採取とが重層的な関係をなしていたのである。これに対して、郷有のツバキ林を持たず、個人レベルでの採取に終始した集落もあった。五輪集落に代表される、18～19世紀の移住民によって形成された集落である。これらの集落では、バラシの後であっても他の集落の郷有ツバキ林での採取ができず、集落近辺の山中や、隣接する集落に抜ける道路沿いのツバキ実を採取していた。歴史的な背景の違いがツバキ実利用に反映された例であり、ツバキ林と個人所有地の両方のツバキ実を採取する利用形態とともに、久賀島におけるツバキ利用の特徴の一類型である。

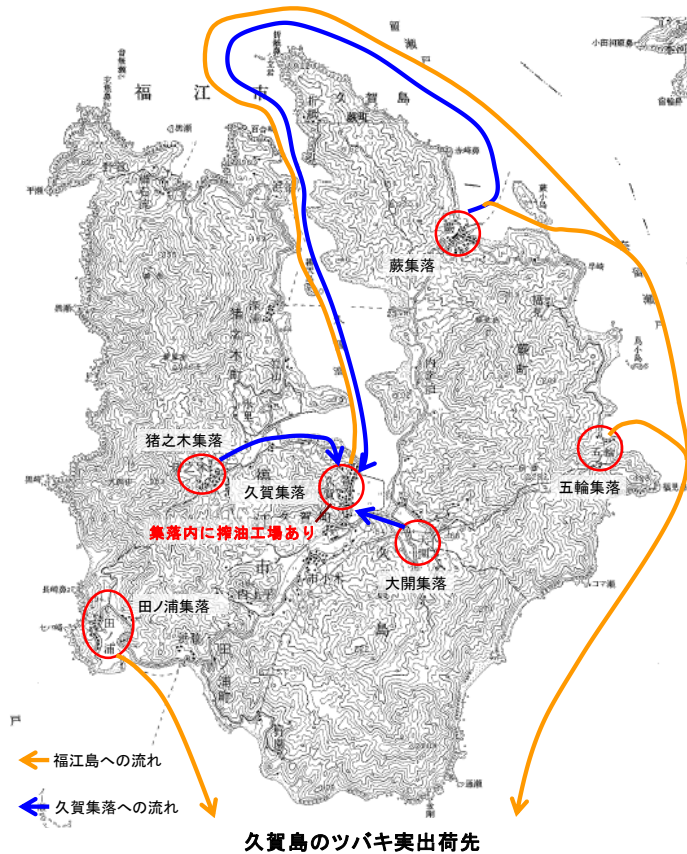
③ツバキ実の出荷・加工

採取したツバキ実は、福江島を中心に上五島地域にも出荷した。外海に面した集落は、個々の集落の港から出荷したが、久賀湾に面した集落は久賀集落の港から船で出荷していた。また、久賀集落には個人が経営する搾油工場があり、地元の集落だけでなく、大開集落や蕨集落からツバキ実を集めて搾油していた。このように、久賀集落は久賀島の政治・経済の拠点であっただけでなく、ツバキ実をめぐる物流の拠点でもあった。

搾油は圧搾法が用いられた。よく乾燥したツバキ実を粉碎し、袋に入れて蒸した後、ジャッキ状またはマンリキと呼ぶ工具で油を絞った。おおよそツバキ実重量の1/4が油になったという。ツバキ油は自家用で、食用油として用いるほか、女性を中心に髪に塗ったり、けがをした

際の塗り薬としても活用された。

このように、ツバキ実採取から加工に至るプロセスは、クチアケなどの独自のルールや専用の作業着であるドンザの存在など、久賀島独特の様相を示すものである。また、各工程を通して集落内での共同作業や集落同士の連携が伴う過程でもあった。これらの過程を通じて、集落内部および集落間の紐帯が強められたことは容易に想像できる。このようなつながりの強さは、各集落内での信仰行事の豊かさや、複数の集落が共同で行う神社の例祭などに反映されている。



(2) 集落との関係

① 土地利用に見る集落の特徴

第3章では、久賀島の集落を土地利用の特徴から大きく3つに分類した。

A. 久賀湾に面した集落

→ 傾斜が緩やかで河川を利用した広い棚田群が特徴

B. 外海に面した集落

→ 急傾斜地で沿岸部の集落と傾斜地の段々畑が特徴

C. 久賀湾と外海の両者の特徴を併せ持つ集落

→ 集落は外海に立地するが、耕作地は久賀湾沿岸にある点が特徴

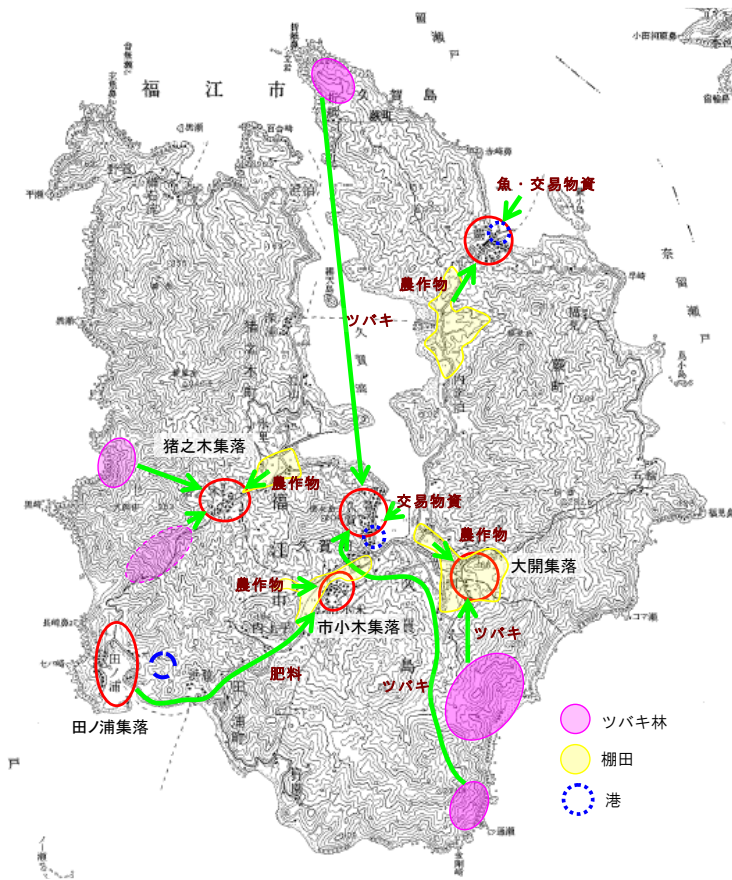
これらは、集落立地と耕作地の関係から分類したものである。この中で特徴的なのは、久賀湾と外海の特徴を併せ持つ集落である。これに該当する藤集落は、一見すると漁村に特徴的な集村形態をとり、実際に漁業や物流にも関わっているが、同時に周囲に耕作地が展開しており、特に尾根を挟んだ内幸泊には、久賀湾に面した広大な棚田を有している（第●図）。いわば、外海と内湾（久賀湾）の資源を利用する生業形態が、土地利用に反映されているとみることができる。このように、尾根を越えて内湾（久賀湾）と外海の資源を利用する生業形態は、久賀湾に面した集落でも確認できる。

②ツバキ実採取にみる集落の資源利用

久賀湾に面した大開集落、猪之木集落は、湧水を起源とする大開川、猪之木川が集落中央を流れ、下流域を中心に傾斜の緩やかな棚田を形成している。生業の中心は稲作であるが、9月～10月にかけてはツバキ実採取を行う。両集落のツバキ林は外海に面した郷有林で、集落からは山の稜線を越えてアクセスしている。



猪之木川流域の水田（左）と大開川流域の棚田（右）



外海と内湾の資源利用状況

一方、同じく久賀湾に面した久賀集落は、干拓以前は港を有し、久賀湾を利用した物流の拠点であった。また、久賀集落では折紙やトウセトなど、外海に面したツバキ林でのツバキ実採取を行っていた。

このように、久賀島における資源利用は、内湾と外海という異なった環境にある特徴的な資源を利用する点が特徴である。立地環境の違いにより異なった土地利用を見せる集落も、資源利用の観点からは集落内の資源のみならず、集落外の環境が異なる資源も巧みに利用する点で共通している。

久賀島を含めた五島列島周辺では、小値賀島の浦集落と在集落の関係のように、沿岸部の海産物

と内陸部の農産物をめぐる集落相互の互恵関係が確認できる。このような関係は、田ノ浦集落と市小木集落のように久賀島でも認められるが、久賀島の最大の特徴は、外海の資源としてツバキ実を選択し、さらに内湾の集落がツバキ実を直接採取に出かけている点にある。これにより、結果として各集落の資源利用の領域が広域に渡ることとなり、久賀集落に至っては久賀島の北端から南端までを活動領域としているのである。このように、ツバキ林は外海に面した環境に特徴的な資源として活用されており、特に内湾に面した集落での資源利用を特徴づける重要な要素となっている。


(3) 他の生業との関係

① 生業暦の比較

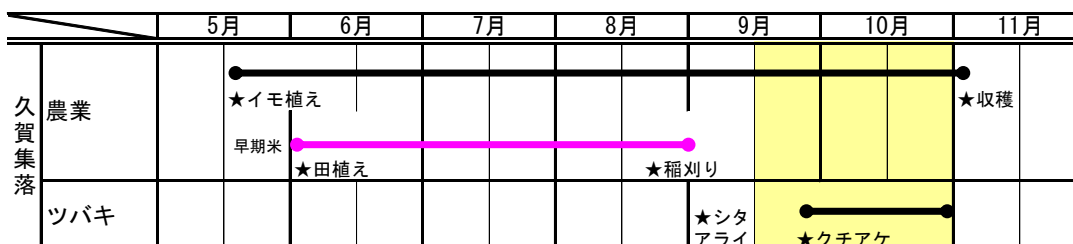
資源利用の項で述べたとおり、久賀島のツバキ実採取は他の生業との複合的に経営されている点が特色である。この特色の一端を示すため、生業暦の比較を行う。

集落別ツバキ実採取時期

	8月			9月			10月		
蕨集落				9/10クチアケ					
五輪集落									
大開集落				9/10クチアケ					
久賀集落							9月末クチアケ		
猪之木集落									
田ノ浦集落									

 ツバキ実採取期間

生業暦の比較 (蕨集落・久賀集落)



 ツバキ実採取期間

ツバキ実採取時期、特にクチアケの時期を集落毎に比較すると、9月上旬から9月末までばらつきがあることが分かる。一番早い田ノ浦集落では8月から採取し始めるが、一般には9月10日前後にクチアケとなる集落が多い。ただ、久賀集落については9月末がクチアケとなっており、最も遅い。採取期間は、おおよそ9月末から10月一杯までとなっている（註3）。

9月10日前後にクチアケとなる蕨集落と、9月末がクチアケとなる久賀集落の生業暦は、別表の通りである。

蕨集落では、6月頃イモ植えが終わって田植えまでの間にシタアライを実施していた。この時期はテングサ・オゴの採集が最盛期となるが、海が時化した日を見計らってシタアライの行っていたという。また、昭和30年代まで普通米を栽培していたが、5月半ばから6月中旬にかけて田植えを行い、9月末に稲刈りを行っていた。ツバキ実採取は9月10日頃クチアケでその後バラシとなり、稲刈りまでの9月一杯採取した。

ところが、昭和40年ごろから早期米が定着すると、田植えが6月上旬には終了し、8月中旬から下旬から稲刈りが始まるようになったため、クチアケの時期が稲刈りの最盛期と重なり、ツバキ実採取が衰退したという。

一方、久賀集落では、昭和30年代からすでに早期米が導入されていた。8月末の稲刈り終了後、9月上旬にはシタアライを行い、9月末がクチアケ・バラシとなり、10月一杯までツバキ実採取を行った。

いずれの集落も、ツバキ実採集時期が他の生業に左右されていた点を指摘することができる。特に稲作の農繁期を避け、稲作とツバキ実採取が両立できるスケジュールとなっていた。一方、早期米の導入に伴って稲刈りとクチアケの時期が重なり、最終的に稲刈りを優先した蕨集落の事例からは、ツバキ利用の優先順位が稲作に比べて相対的に低かったことを読みとることができる。

②生業間の結びつき

生業間のつながりを示す事例として、田畑の肥料があげられる。ツバキ油の絞りかすは、畑の肥料として活用されるほか、田んぼの害虫駆除に使われた。また、かつて田ノ浦集落で取れたキビナは、肥料として市小木集落の水田に蒔かれていた。蕨集落では、水田の肥料として奈留島からイワシ魚粉を購入していたという。このように、農業、漁業、林業（ツバキ）が密接に関連し合って成立していた点が久賀島における生業の特色である。

集落との関連では、市小木集落と田ノ浦集落の関係は、沿岸部と内陸部の互惠関係を示す好例である。また、蕨集落にみた久賀島外との交流は、神社の神官の往来など無形の要素にも反映されているほか、五輪集落における農繁期の労働移入（奈留島）や田ノ浦集落における福江島との結びつきにも垣間見ることができ、外海に面した集落の共通した特性であったと考えられる。同時に、活動領域の広域性という点では、内湾に面した集落と共通した特徴を併せ持っていたと言えよう。

(4) ツバキ実採取の衰退と現在

① ツバキ実採取衰退の要因

ツバキ林でのツバキ実採取は、昭和40年代から衰退に向かったことは各集落共通しているが、衰退の原因については個々の集落で事情が異なるようである。これは、ツバキ実利用や他の生業との関係が、集落によって微妙に異なっていることを反映している。

蕨集落の場合、早期米の導入が衰退の原因になったことは先述したとおりである。早期米栽培とツバキ実採取を両立させていた久賀集落の場合、植林を始めたことが衰退の原因であるという。久賀集落は、昭和40年代に、それまで利用してきたツバキ林をすべて伐採し、伐採後のツバキ林にスギやヒノキを植林したという。昭和40年代は全国的に植林がブームになった時期であり、山への働きかけが変化したことがツバキ利用の衰退の一因となった。大開集落の場合、高齢化が最大の原因であったという。高齢化により、ツバキ林までの移動や木登りなどが困難になり、ツバキの利用が激減した。実際には原因は一つではなく、これらの要因が複雑に絡んでツバキ林利用がおろそかになったのであろう。

② ツバキ活用の動き

久賀島では、古くからツバキを保護し活用する試みが官民双方から行われてきた。昭和29年に制定された旧久賀島村によるツバキ保護条例は、福江市との合併を控えた旧久賀島村が生き残りをかけたツバキの保護活用政策の一環であった。昭和40年以降の産業構造や社会構造の変化に伴って、久賀集落でのツバキ林伐採とスギ・ヒノキ植林の事例のように、実効性が薄れ形骸化した観も否めないが、現在の島民はヤブツバキを保護する意識が高く、平成16年の五島市合併の際に「椿樹及びしきみ樹保護条例」を制定したことで、その想いは確実に引き継がれている。

現在、ツバキ油は化粧品業界で注目され、ツバキ実買い取り価格も高騰している。これに伴ってツバキ実採取が個人レベルで活発になっているが、沿道沿いや畑の防風林、個人所有の山林での採取が中心であり、かつてのツバキ林は利用されていない。また、ツバキ実採取時期が競合し、未熟なツバキ実を採取する事例や、民有地のツバキ実を他人が採取する事例も聞かれる。ツバキ実採取に関するかつてのルールが見直されるべき段階にあると言えよう。

活用面では、亀河原ツバキ林を借上げて、島内の子どもを対象にツバキ実採取体験を行っている「久賀島やぶつばき会」など、民間レベルでの取り組みも進んできている。恒例の五島椿まつりはこれまで16回を数える。また、2005年2月には「第15回全国椿サミット五島大会」が開催され、体験講座などの各種行事が行われた。これを契機に、五島市は平成21年3月に「ツバキ振興計画」を策定し、遊休地や街路への植林の推進や観光での活用、ツバキ油加工品の商品開発などを政策として掲げ、五島市振興政策の一つに位置づけた。平成21年に五島市椿園、五島鬼岳樹木園、鏡瀬ビジターセンターが国際椿協会から国際優秀椿園の認定を受けたことは、これらの取り組みが国際的にも注目されつつあることを印象づけるとともに、今後の取り組みの弾みになる出来事であった。ただ、現状では計画策定が中心であり、本格的なヤブ

ツバキの保護と活用はこれからの課題となっている。

第3節 文化的景観としての価値

(1) 自然環境に対し、人々が営む生業の影響を与えることにより、形成された自然的空間の価値。

久賀島では、ツバキ油生産を維持・向上させていくため、ヤブツバキを大事に保護してきた。このため、久賀島の植生状況を概観すると、他の樹種に比較してヤブツバキの自生が優勢となっており、ヤブツバキ原始林(一部は県指定天然記念物として保護されている)やツバキ林が島内各所に確認され、久賀島の森林域におけるヤブツバキの自生密度は下五島の他地域よりも密度が濃い結果となっている。

このように久賀島における自然的空間(主に植生)は、ツバキ実の採種及びツバキ油の生産を発展させていく上で、ヤブツバキ樹を保護するという人為的な影響を与え続けられたことにより形成されてきた文化的景観である。

(2) 離島という特殊な環境の中で、特異な地形を利用し、築きあげてきた生業的空間の価値。

馬蹄形の地形という地形的影響下のもと、島の中央部の久賀湾に中小河川が流れ込み、他の五島列島の島々と比較して水系が発達している。このため、久賀湾を囲む地形は湾に流れ込む中小河川の影響により浸食され、下流域には浸食作用の結果形成された極小規模の沖積地が点在する。

久賀島の人々は生業を営む上で、この沖積地を水田地帯へと変容させ、急峻な山々から流れ出る豊富な水量を利用し、山腹まで水田耕作地を広げてきた。久賀湾を囲む一帯には、五島列島には珍しく棚田群が形成され、その結果、久賀島は五島でも有数の米所として発展してきた。

このように、久賀島における現在の生業的空間は、地形の制約・影響を受けながらも、人々が生業を営む中で特異な地形を巧みに利用しながら築きあげてきた文化的景観である。

(3) 選定基準の適合。

(三) 用材林・防災林などの森林の利用に関する景観地

(八) 垣根・屋敷林などの居住に関する景観地

【脚注】

1. 折紙に展望台を設置する際、雑木だけを払ってツバキ樹を顕在化する取り組みを行ったところ、かなりの密度でツバキ樹が自生していることを確認したという。現在でも折紙展望台周辺ではまとまった数のツバキ樹を目にすることができる。
2. 猪之木集落では、ツバキ林の意図的な管理を特に行っていなかったが、ツバキ林が集落から外海の釣場に向かうルート上に位置したため、林内の人の往来は比較的多かったという。外海に面した立地特性と最低限の人為的な働きかけで、結果としてツバキ林が維持されていた典型的な事例であろう。
3. このように、採取時期が異なる集落同士がそれぞれの時期にツバキ実を採取できたのは、前提として、集落が利用するツバキ林が固定されており、たとえバラシの後であっても、他の集落は不可侵であるとの暗黙の了解が存在した点は無視できない。現在のようにツバキ林管理がなくなり、いつでも誰でもどこからでも採取できる環境であれば、早い者勝ちで採取され、久賀集落のように9月末からでも採取できる環境はあり得なかったはずである。

【参考文献】

- 立平進 1981「五島・久賀島の民俗」『長崎県三川内、久賀島、野母崎の文化―特定地域の基礎文化調査報告書―』長崎県立美術博物館
- 五島・久賀島キリスト教墓碑調査団編 2007『復活の島 五島・久賀島キリスト教墓碑調査報告書』長崎文献社

月川雅夫・立平進編 1984 『明治 13 年調べ長崎県佐賀県における農具図録』長崎出版文化協会
宮本常一 1952 「五島列島の産業と社会の歴史的発展」『五島列島～九十九島～平戸島学術調査書』長崎県
三浦伊八郎 1965 『椿春秋』
久保 清 1934 『五島民俗図誌』
久賀島村 1951 『ひさか椿』
内海紀雄 1985 『五島・久賀島年代記－藩政時代と明治前半期を中心にした概観－』
五島観光連盟編 『五島つばき事典』
瀬川清子 1937 「五島雑記」『旅と伝説』第 9 卷 10 号
福江市史編集委員会編 1995 『福江市史』